



筑紫女学園大学リポジット

Practice of Childcare based on Shin Buddhism :
Forty years Experience in the Kindergarten
Attached to Chikushi Jogakuen University Junior
College

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 牧野, 桂一, 小野山, 佳代, 青沼, 典子, MAKINO, Keiichi, ONOYAMA, Kayo, AONUMA, Noriko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/481

まことの保育への実践的取り組み

～筑紫女学園大学短期大学部附属幼稚園での40年間の経験～

牧野 桂一・小野山 佳代・青沼 典子

Practice of Childcare based on Shin Buddhism

Forty years Experience in the Kindergarten Attached to Chikushi Jogakuen University
Junior College

Keiichi MAKINO, Kayo ONOYAMA, Noriko AONUMA

はじめに

福岡県内における幼児教育は、全体の9割以上が私立によって担われている実態がある。各園はその中で、教育基本法並びに学校教育法をはじめとする関係諸法規に基づきつつ、独自の保育実践を展開していることが一般的である。そして、大学附属幼稚園や単立幼稚園、あるいは保育園の併設といった設置形態の違いもあることから、それぞれの園の保育内容には、相応の多様性が認められる。そのことは、園児募集等の際にも、立ち位置や保育理論、実践報告等といった形を経て、内外にアピールされていることが少なくない。

本稿では、そうした実態を踏まえ、筑紫女学園大学短期大学部附属幼稚園（以下附属幼稚園という）が今日まで展開してきた教育について、その理念と実践内容等の整理を行うとともに、大学附属幼稚園という教育上の特性に加え、仏教、特に浄土真宗の精神に基づく保育内容について整理を行い、高度な保育理論を備えた現場へと今後昇華していくための基礎的知見を得ることを目的にまとめたものである。

そのような意味で、幼稚園の現場を調査分析する保育・教育論文とは立ち位置を違えるため、本論では、問題・目的・調査分析・結果・考察といった従来型の論文形式をあえて踏襲せず、幼児教育の独自性の再確認および発展的展望を描くため、当幼稚園の開園（昭和47年）から現在までにおける現場の知の整理及び、学内外での共有化を図ることを第一義としている。したがって、位置づけ的には「実践報告と論考」に類するものといえよう。

近年の幼児教育を取り巻く情勢を見ると、政権交代も挟んで幼稚園や保育所のあり方が国民的な課題となっているように思える。とりわけ、待機児童解消問題も含めて「幼保一元化」「幼保一体化」「5歳児の義務教育化」「こども園の構想」等の検討が進みつつある現状から考えると本稿は時宜に適っていると考える。

I 附属幼稚園に込められた願いと建学の精神

1 筑紫女学園建学の精神と附属幼稚園の教育

(1) 附属幼稚園の設立

筑紫女学園は、1907年、創設者・水月哲英師により、仏教精神、特に浄土真宗の教えに基づく人間教育を目的に設立された。以来、学園発展の中で筑紫女学園短期大学に幼児教育科が増設されたことに伴って、1972年、浄土真宗本願寺派福岡教区教務所にあった本願寺中央幼稚園を一部引き継ぐ形で、附属幼稚園も開園した。

(2) 附属幼稚園における「建学の精神」の解釈

筑紫女学園の建学の精神は、具体的に「自律」、「和平」、「感恩」の三項目としてまとめられている。附属幼稚園においては、これらの項目をおおよそ次のように解釈して受け止め、幼児教育の実践へと応用的に展開している。

①自律（自己への目覚め）

自律とは、一人一人の人間がかけがえのない自分の人生を自らが自主的・主体的に尊く生きるというように受け止める。それは、この世の闇によって見えにくくなっている本来の自己を照らし出してくれる真実なる光に出会い、その光によって自分自身を深く見つめるということである。そのようにして、一人一人が自己を見つめるとき、これまでの自己中心的なあり方の過ちに気づかされ、「周りのさまざまはたらきよって生かされている」という自覚にたどりつくことができる。この自覚を基礎として、自ら考え、自ら判断し、自ら行動していくということが自己への目覚めであり、自律ということである。附属幼稚園では、このことを「みほとけさまをおがみます」というような約束として受け止めている。

②和平（他者への目覚め）

和平とは、自分の周りにある他の全ての存在を自分と同じように認め、互いに尊重し合う中に生まれる穏やかな世界を指している。自己に目覚め自己を律することができたとき、人はそれぞれ一人一人が、かけがえのない自己を生きている身であることに気づかされる。もし自己中心的な価値観にとらわれて他者を軽んじたり、一人一人の人間の尊さを無視して一方的な価値観を強要すれば対立と争いを引き起こすだけで、本当の穏やかな世界は決して実現しない。附属幼稚園では、このことを自利利他の思いに基づいて「みんな仲良くいたします」というような約束として受け止めている。

③感恩（生命への目覚め）

感恩とは、自分を支えて生かしてくれている大いなるはたらきへの感謝というように受け止める。自己への目覚めによって自分自身の内側に眼を向けるとき、人のいのちは、無限のいのちのつながりの中で今を縁あって生き、この自分といういのちに恵まれ、育てられてきたことに気づかされる。だからこそ、そのいのちのつながりの中で、恵まれた自分のいのちを頂く必要があるということも理解できるのである。こうして、自分を支えている、はかり知れない無限のはたらきに感謝の思い抱き、そのはたらきに応えていく生き方を大切にしている。附属幼稚園では、このことを「い

つもありがとうといいます」という約束として受け止めている。

(3) 附属幼稚園における「まことの保育」の受け止め

「まことの保育」という呼び名は、醍醐定徹が『保育資料（1969年7月号，pp6）』の中で初めて使用した言葉と言われている。それ以前には、大関尚之が用い出したとされる「真宗保育」という呼び方がむしろ一般的であった（醍醐 1995）。いずれも、一人一人の子どもを仏の子として「真実なる道」を歩ませようとする保育・教育観が底流にあるといえようが、附属幼稚園では特に、以下の「めあて」を設定し、具体的な教育を展開している。

- ①子どもたちが、深く自己を見つめることを通して、他者とのつながりに気づき、あらゆるいのちの恩恵に感謝しつつ、さまざまな課題に直面する社会の中で、恵まれたいのちを生かし自分の役割を果たすことの出来る人間を育成する。
- ②子どもたちの生活を通して、子どもたちと共に喜び合う「まことの保育」を基本とし、一人一人の子どもを仏の子として尊く向き合う教育を実践する。
- ③一人一人の子どもが豊かな自然環境の下で多様な経験をし、感性豊かに育ち、心豊かに成長し、すべての子どもが持つ可能性の芽としての仏性を大切に育てる教育を実践する。
- ④子どもたちのことを一番に考え、一人一人が尊い存在として主役になる教育を実践する。
- ⑤一人一人の子どもたちの関わりを大切にして、自分以外のものとも尊く向き合い、感謝や思いやりの心を育み、人間を大切にする教育を実践する。

(4) 親鸞の教えと附属幼稚園における教育観

浄土真宗本願寺派における保育実践の理念と計画は、「親鸞聖人700回大遠忌」に当たり、1960年3月に「真宗保育指導計画」が公表されたことで確立したといえる（醍醐前出）。本園は学校法人であることから、この浄土真宗本願寺派における保育指針に重きを置きつつも公教育的な観点も併せ独自色を掲げる教育を実践してきた。

附属幼稚園における「まことの保育」を一言で表すと、「親鸞の生き方に学びつつ、生かされているいのちに目覚め、共に育ち合う」教育ということになる。「いたずらっ子はいたずらっ子のまんまに生き生きと、やんちゃな子はやんちゃなまんまに澆刺と、元気な子は元気なまんまにすくすくと、こだわりのある子はこだわりのあるまんまにのびのびと生かされて生きるいのちを喜ぶ」ということである。つまり、一人一人の子どもの個性や特性が、あるがままに輝くことで、本来の自分になっていく、そんな育ちを見守るのが附属幼稚園の教育の姿勢である。子どもたちが、自然の中での大きないのちに生かされるということは、子どもたちを取り囲む大自然の中で展開される子どもたちの自発的な遊びなどの活動を重視するということでもあり、そこでは、何よりも子どもたち一人一人の自主性、自発性が大切にされる。それはまた、「自ずから然らしめる」という自然であり自らに由るという意味での「自由」を大切にするということでもある。

すなわち、附属幼稚園における教育は、親鸞の教えを象徴する「無為自然」を具体化した子ども中心の教育であり、子どもたち一人一人の自主性と自発性に基づいた遊びを中核にした自然教育の実践といえよう。

2 附属幼稚園の教育

(1) 建学の精神の基盤に立つ教育

- ①附属幼稚園の教育は、教育基本法並びに学校教育法をはじめとする関係諸法規、並びに教育課程の基準である幼稚園教育要領に基づいた教育を行う。
- ②附属幼稚園の教育は、建学の精神に基づいた「まことの保育」を基盤に開かれた幼稚園教育を行う。

(2) 生かされて生きていく力を育てる教育

「生かされて生きていく心豊かな園児の育成」をめざし、「子どもが一番、子どもが真ん中、子どもに真っ直ぐ」を共通の指針として共有し、次のような教育を進める。

- ①仏様に親しみ、いのちの尊さと生きる喜びを感じ取ることができる子どもを育てる。(生命尊重)
- ②身近な自然や社会の恵みに感謝し、明るく生きる子どもを育てる。(報恩感謝)
- ③みんな仲良くし、希望を持って自分と同じように他人も大切にできる子どもを育てる。(和合精進)

(3) 教育方針

- ①健全な心と体を育てるために、基本的な生活習慣を身につけると共にしなやかな対応性のあるからだの基礎をつくる。
- ②集団生活を通して、家族や身近な人への信頼感を深めると共に他の人々と親しみ支え合って生活するために人とかかわる力を養い、人への愛情や信頼感を育てる。
- ③身近な自然や環境に興味・関心を持ち、それらと触れ合う中で、観察力、洞察力、思考力を養い、いのちの尊さに気づくと共に自然への関心を育て、豊かな心情を養う。
- ④日常生活を通して、自らの言葉で気持ちを表現する力を身につけ、相手の存在を受け入れる力を養うと共に喜んで話したり、聞いたりする態度や言葉に対する感覚を養う。
- ⑤さまざまな体験や表現活動を通して、自らの表現方法で自らを発信していく力を養うと共に豊かな感性や創造性を育てる。

II 附属幼稚園における建学の精神に基づいた教育実践の軌跡

戦前に、個人的教育学という視点から「個」を大切に、谷本富の保育観には学ぶべきところが大きい。龍谷大学でも教鞭を執った彼は、保育において「遊び」を重視する姿勢を見せた。その背景には、戦前の国家主義的な教育観に対する疑問があったようだ。

谷本は、国家や社会といったものは、それを担う「個」という単位があってこそ成り立つ概念であるとの思いを持っており、個への社会的・教育的働きかけに先んじて、個の自由が確保されていることこそが必要という立場であった。

先の醍醐は、仏教精神に基づく保育の歴史を概観する中で、特にその部分に注目している。「まことの保育」も、押しつけ(教育)を行ったり、枠にはめるべきものではなく、「個」の自由(な振る舞い)を最大限に尊重することにその本質があると考えられている。谷本の教育観には、親鸞の自然法爾の思想が見事に重なっており、この点に醍醐は惹かれたのであろう。

ここから、「個である子ども」がそのままに「自然のまま」に振る舞う姿の象徴としての「遊

び」の重要性が浮かび上がる。つまり、「まことの保育」に照らしてみても、本来的に「遊び」が相当に重要と理解されるのである。

以上のことから、本園でも「遊び」を特に重視し、以下のような時間を確保している。

1 自発的な遊び

附属幼稚園では、登園してきた子どもに対して、まずは好きな遊び、自分のやりたいこと、一緒に過ごしたい友達等を自分で選び、たっぷりと「自発的な遊び」ができるようにしている。

この時、教師は子どもと同じ遊びに参加したり誘ったりしながら、その時々の子どもの興味や関心を探り、遊びをどのように発展させ、方向付けていったらよいかを把握している。遊びの中に確認される友だちとの関わりを見つめ、何が足りないのか、何を考えさせたらよいか、どうつなげばうまくいくのか等を判断しながら遊びを方向付けていくのである。

遊びの切り上げ方や発展への応用等は、子どもだけでは十分にできないことも多いため、教師と一緒にそうした機会を持つことが必要で、それにより自然で無理のない対人関係の構築方法や自らを律する行動を覚えていくきっかけとなすことができる。

園児は、登園直後の一人遊びを経てから集団遊びへと移行していく。その後、クラスに集合した際、全員の前でそれぞれの遊びを教師が紹介し、子どもの遊びが発展するきっかけを与えるようにする。ここでは、特に遊びが他の子どもたちの間に深化・拡大していくよう、教師自身も常に工夫のためのアイデアや発展のためのヒントを蓄積しておくようにしている。

自発的な遊びは、ただ単に好きなことをして、気ままに遊ばせるということではない。教師が、今、何を経験させたいのか、その経験を通して何を学ばせたいのか、その為には何を用意すれば、子どもが「やりたい」「おもしろそう」と興味を示し、飛びついてくるかを常に意識している。子どもには、自然な遊びであっても教師にとっては見通しのある遊びということができるのである。逆に言えば、子どもはまちががなく自発的に自由に遊んでいるが、それは教師の十分な経験と智慧によって配慮された世界の中での展開でなければならない。本園では、そのような子どもの世界を実現しているのである。

2 個別的遊び世界の構築

幼稚園は同じような年齢の子どもたちの集団の場であるが、「自発的な遊び」の体験の積み重ねが、子どもの知的欲求のレベルの差異にまで繋がってくるのが、附属幼稚園では経験的に理解されている。なるべく、この「自発的な遊び」時間を妨げないことが肝要である。

そのため、附属幼稚園では、時間の組み立ては固定化されたものではなく、「その日の活動内容の密度」等を適宜見極め、微調整をして展開されている。たとえば、クラスの全員が顔を合わせて歌ったり、季節を感じたり、話を聞いたり、発表したりといった時間は、一日の中で必ず確保されているが、固定された時間割りに沿ってではなく、一日の中で最も自然な時間の流れの中で実践されている。こうした臨機応変な対応ができるのは、一般的な幼稚園の場合と違って附属幼稚園の場合は、園児数に対して活動に必要な教員人数を確保しているという附属幼稚園ならではの教育体

制によって実現しているところが大きい。

3 自然との関わりの重視

附属幼稚園では、J・ルソーの提唱を待つまでもなく「自然」には大きな「教育力」があると考えている。そしてまた、自然は仏教で重要な「あるがままで満されている」ということを教えてくれる。永遠の過去から未来に続く生態系を作りあげ的过程中で、強者といえども決して無駄な殺生はせず、「いのちを繋ぐための（捕）食」以外には、概ねそれぞれのいのちを平和裡に全うするという偉大な真実を教えてくれる。このことは、現代社会が繰り返している無駄な争いは、結局その社会の中で自らを滅ぼすことに繋がることを示唆しているかのようだ。こうした自然の摂理を子どもたちが直接体験し、感得する中で得られる教育的効果は、大人には真似できないものであり、自然による教育に委ねるほかないのである。このように、子どもたちに自然を体験させることは、生きる術を身に付けていくことにつながっていると、附属幼稚園では理解している。

以上のことから、園の周囲の自然をできるだけ子どもたちの日々の生活に取り込み、思い切り自然に触れて遊べるよう心がけている。また、附属幼稚園は極めて恵まれた自然環境の中にある。園舎後方には、「響流の森」があり、少し離れた飛び地には「百年の森」も有する。

現代社会では、安心安全の確保等が最優先されることもあり、子どもたちが地域環境の中で自然と触れ合う機会が失われていることが多いと言われている。子どもの道草の実態に関する研究状況からもそれは明らかである（水月 2006）。このことは、附属幼稚園が保有する恵まれた自然環境の有益性が高まっているということもできる。以下に、附属幼稚園の有する森について紹介する。

(1) 百年の森

幼稚園バス車庫の裏手の小さな丘を「百年の森」と呼んでこの10年間、木々を植えて森に育て上げ親しんで来た。子どもたちの目の高さで直接手に触れて楽しむことができる果物の木である山桜桃、柿、^{ゆすらうめ}李、^{すもも}蜜柑、枇杷、山桃等を植え、櫟、まてばしい、あらかし等の実が団栗となる木を配置している。雑草でしかないおなもみ、数珠玉、洋酒山牛蒡等もそれとなく配置し、森の住民としての役割を担ってもらっている。そして、子どもたちが、ごく自然な形で楽しい空間に溶け込むことができるよう心がけている。都会育ちの子どもたちは、この自然の中でほとんどが初めて自分で「山桜桃」を取り、そのまま口に入れる体験をする。全園児に行き渡るくらいたくさん実る「李」は、季節になると、毎日、赤くなるのを楽しみに見に行き、熟したら皆で食している。このときの木からちぎったものを食べる経験は大きな感動を子どもたちに与えてくれるのである。

「百年の森」の足元の雑草は、虫の宝庫でもある。ダンゴ虫、テントウ虫、モンシロチョウ、ショウリヨウバッタ、ツチバッタ、キリギリス、ウマオイ、アゲハチョウ、トノサマバッタ、ハンミョウ、ハナムグリ、カマキリ、コオロギが四季の変化と共に現れ、子どもたちの興味をかきたてる。「百年の森」で虫に出会い、虫の生態に傾倒している虫博士の子どもが毎年クラスに何人も出てきている。子どもたちのほとんどは、百年の森の虫を通していのちと出会い直接いのちと触れ合っている。見ることも捕まえることが嬉しい段階から、虫が動かなくなっている姿を見て、いのちに終わりがあることを知るのである。このように虫のいのちを通して、子どもたちは小さな悲しみを体験

しているのである。捕った虫を育てたり、草地に放したりして、虫には虫のいのちにとって最適の場所があることを知る段階へと移行する。小さな百年の森だが、子どもたちに日々たくさんの自然の営みを教えてくれているのである。

(2) 響流の森

小さな「百年の森」に比べ、もっと大きな自然に囲まれた森が「響流の森」である。森の入り口に立つと「あっ、なにか、においがする」と子どもたちは森の「におい」を感じ取る。子どもたちの内なる野生が目覚める瞬間である。空を覆う雑木の森、起伏のある地形に足を踏み入れ走り回る。知らず知らずに五感を最大限に発揮して体を動かし、感覚を研ぎ澄ます。森は子どもたちにとってワクワクする空間、夢のある時間を体験させてくれる。

森は季節毎に違った姿を見せ、子どもたちは森に入る度にさまざまな花や木の葉を拾い、木の実、キノコを見つける。入る度に異なる風の音、木々のざわめきを聞く。自然が作った崖を登り下りする遊びの体験は冒険家の体験そのもので、子どもたちにとってはいのちがけの体験である。遊びに浸りながら、自らを守る動きや判断力を身につけていく。「響流の森」は子どもたちに自然な形で生きる術を教えてくれている。

4 いのちのもつさまざまな意味に気づく契機

(1) 自然の中の動物のいのち

ダンゴ虫と出会い、季節毎の虫たちの出現を見て喜び、虫を育て、その死を体験する。ここで、全ての生物のいのちの存在を知る。自然との関わりは、全てのいのちあるものの「生と死」の大切さを学ぶ契機となっている。

(2) 自然の中の植物のいのち

蓬、竹の子等が、園の周辺で収穫できる。また、稲や芋は、園で栽培して、その生育に必要な手間や時間を体験し、それを食料として食する体験は、いのちの食の体験として、子どもたちの心に基本的な経験として一生残る。この体験が、附属幼稚園教育の大きな柱である。

①蓬

葉の形もさることながら、裏側の白いビロードが、識別のポイントであり、この知識で、蓬探しをする。葉をちぎり、独特のにおいも確認する。収穫した蓬を挿り鉢で挿り、団子粉と混ぜ、蓬団子づくりをしている。自分達の手で摘んだ葉っぱが、おいしい食べ物になることで、子どもたちは、蓬という薬草を一生忘れない植物として自分の中に取り込む。

②竹の子

年長組は、学年全員による「竹の子掘り」で新学期をスタートする。園の周囲の孟宗竹の林から、子どもたちの手だけで、竹の子を掘り出す。子どもたちは、驚くほどの集中力と粘り強さで、地下茎まで掘りあげる。不思議な光沢と独特の色彩の竹の皮を懸け、いのちとして数え、大小順に並べて遊ぶ。知らず知らずのうちに数を学ぶ。茹でた竹の子を包丁で切る体験は、集中しなければ自分が怪我をするため、子どもたちは真剣になる。これで、危険な道具の使用に必要な体験をする。最後は、竹の子御飯にして皆で食し、春の季節を舌で味わう。子どもたちにとって「竹の子掘り」は、

全てが深く記憶に残る貴重な体験である。

5 絵本の読み聞かせ（知的体験のはじまり）

知的体験の開始について、附属幼稚園では、絵本の読み聞かせが最も無理のない自然な知的体験の開始であると実践的に理解している。子どもたちの毎日の生活の中で必ず絵本を読み聞かせる時間を設定しており、子どもたちは、年間延べ200冊以上の絵本と出会っている。絵本の読み聞かせの時間も子どもたちの大切な経験であるから、周到的配慮が必要である。

絵本を読み聞かせる時間は、単に本を読んでもらう時間ではない。教師とクラスの子どもたちが、心と心でしっかりと結びあって、共通の絵本空間を体験する時間として設定されている。一日の中心、あるいは、終わりの時間にゆったりとした気持ちの中で、その時々選ばれた良質の絵本が提供する面白くて楽しい、たまには恐ろしくて悲しい空想世界を共に体験することになる。

自然な形での喜怒哀楽の体験は、子どもたちを情緒豊かな人間へと育て、感性豊かな集団がさらに相互作用による個人の感性を育むことは、教師と一体となったクラス体験でしか得ることのできないものである。子どもたちの感性の豊かさは、体験した絵本の世界が、子どもたちの手により遊びの中で再現されることにより、一層拡大される。教師は、この感性の連鎖の見守り役としての大切な責務を負っている。出発点である読み手教師の感動の伝達技術は、その意味で洗練されなければならない。日々の絵本の読み聞かせが、教師自身と子どもたちとのコミュニケーション技術向上の機会と認識する必要がある。

日々の読み聞かせは、子どもたちが楽しみに待つ時間になっている。読み手の情感溢れた語り口により、子どもたちは、絵本の世界に引き込まれる。耳から入る言葉が、目で見える絵以上のものを子どもに想像させ、臨場感をかきたたせる。食い入るように絵本を見ている時、子どもたちには、「聞く力」「聞き取る力」がついているのである。この過程を経た子どもたちは、自然に自分から絵本を読もうとするようになる。文字は特に教えなくても、豊かな想像力が、その意味を推量させ、「読む力」もついてくるのである。やがて、さまざまな背景を想像する力、つまり「思考力」へとその力は発展する。この時期の読み聞かせは、子どもの本への愛着をゆるぎないものにする。

どのような内容の絵本が、どの成長過程の子どもたちにとって効果的かの定式は、存在しない。絵本の選定は、教師側と子どもたちが、日々一緒になって体験的に積み重ねられる。教師が、大人の感覚でこれは面白いと思っても、子どもたちが、さしたる反応を示さないことも多々ある。子どもたちの感受性のレベルは、「共通体験」によってのみ、教師に感得される。多くの子どもが喜び、教師も納得のできる良本は、「附属セレクト90」やホームページ「おすすめ絵本」に紹介し、家庭での活用を促している。

かつての園児が親となって、本園の思い出の絵本の話を書くにつけ、幼い時の読み聞かせの時間が、子どもの心の中にしっかりと生き、楽しい記憶として残り、我が子に本園を選択する動機となっていることを知り、絵本の持つ力の偉大さを改めて認識させられている。

6 竹馬作り

既製の精密な遊具に囲まれて育つ子どもたちにとって、唯一手作りの本格的遊び道具の自作に挑戦するのが、親子竹馬作りである。この自作体験は、今では、附属幼稚園でしか体験できない貴重な物作り体験である。子どもたちが、親と一緒に作った竹馬は既製品の竹馬とは違い、永く思い出多き宝物として家庭に残る。子どもたちは生涯、竹林の側を通る度に、竹を使って父や母と汗水流して竹馬を作った懐かしい一時を、思い出すことになる。

運動会が終わった10月末、保護者全員が、竹馬作りのために幼稚園に集合する。竹と針金で作る竹馬は子どもたちのサイズに合わせた手作りであり、既製品にはない愛着心があり、物を大切にするきっかけを学ぶ。親の作業を子どもたちが手伝い、親が必死になって作る姿を子どもたちも真剣な眼差しで見つめる。親子が文字通り一心同体になった瞬間である。簡単な構造の竹馬であっても、実際に手作りすると、大変な作業であることを子どもたちは実体験で学ぶ。

完成間近になると、子どもたちの顔は輝き始め、矢も盾もたまらず試乗に心を膨らませる。完成して早速外に出て親子一緒に試乗への挑戦が始まる。この強い思いが、次の日からの竹馬への挑戦を一層加速させる。親・子・教師の力が合わさり、子ども同士の刺激も加わって、ほとんどの子どもが、竹馬に上手に乗れるようになる。毎年体験することとは言え、子どもたちの運動能力の発達には驚かされる。竹馬は子どもたちにとっては、高い目線から外界を見る効果もあってか、だんだんと上達する過程を経験することにより、自信をつけさせる。就学前、心身のバランスが取れてきたこの時期にピッタリの活動となっている。

竹馬作りから4ヶ月、卒園を間近にした2月末に竹馬披露会を催す。これは、子どもたちの成長をしっかりと保護者が感じる1日となっている。手作りの竹馬で技を競った竹馬披露会は懐かしい幼稚園時代の思い出となっている。

Ⅲ 大学附属幼稚園としての教育計画

これまで述べてきた幼稚園教育のあり方を具体的な姿として表したものが、附属幼稚園の教育計画である。本研究においては、その全てをここに提示することはできないので、ここでは、概略を紹介することにしたい。

1 附属幼稚園教育課程（別紙資料1）

附属幼稚園の全園児を対象に、それぞれの年齢毎の育ちを目指したものを一覧表にしたものが資料1である。附属幼稚園では、育ちの継続性を重視しているので、このように園全体の子どもたちの育ちが一目で見られるようにして、その情報を全教職員で共有している。ここに提示しているものは、紙幅の関係で実際のものの略案を提示している。

2 年齢別年間教育計画（別紙資料2）

附属幼稚園教育課程で示したそれぞれの年齢の子どもの一年間の教育目標と教育内容を年間計画

としてまとめて示したものが、資料2に示した年齢別年間教育計画である。自発的な遊びを中心に保育を展開していくために、全職員が共有している一年間の目標と子どもの育ちの見通しである。ここでも紙幅の都合で、年長児を例として取り上げ、その略案を示している。

3 月間教育計画（別紙資料3）

年齢別年間教育計画では月別にその流れを示したが、実際の保育の展開では、それらを12月に分けた月間の教育計画案を作成し、それをさらに細かく週案として立案している。勿論日々の保育に当たっては、それぞれ日案を共有しながら同年齢の子ども同士との交流と共に異年齢の子どもたちとの交流も交えながら園全体として幅広い活動を繰り広げている。ここでは、年齢別年間教育計画との関連で年長児の4月の教育計画案を資料3として取り上げ、具体的な例として示している。

おわりに

本研究は、平成25年度、牧野が園長として着任し、前任の笠唯信園長の仕事を引き継いで、小野山佳代教頭を中心に附属幼稚園での実践をまとめたものである。全体的な附属幼稚園の教育の中味については、現在、附属幼稚園の教職員必携として一冊の本にまとめているので、そちらに譲り、ここでは、これまでの附属幼稚園40年の歴史を問いかけながら、「まことの保育」が示してくれている方向性を明らかにした。

本稿の作成過程では、法人本部の笠唯信元園長と附属幼稚園八谷俊一郎現園長から多大なるお力添えを頂いた。また、人間環境学の研究者でもある法人本部の水月昭道氏からは本稿全体について貴重なアドバイスを頂いた。記して感謝申し上げたい。

引用文献・参考文献

筑紫女学園（2012）『聖典』

筑紫女学園大学短期大学部附属幼稚園『園児のための聖典』2010

醍醐定徹（1995）「蓮如上人の真宗保育（まことの保育）（2）」岐阜聖徳学園紀要. pp13-39

稲葉宏雄（2004）「近代日本の教育学－谷本富と小西重直の教育思想」世界思想社

水月昭道（2006）「子どもの道くさ」『居住福祉ブックレット7』東信堂

秋田喜代美・無藤隆（1996）「幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討」
教育心理学研究44

嘉数朝子・池田尚子・友利久子ほか3名（2004）「家庭での読書環境が心の理論の発達に及ぼす効果」琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要 No. 6

山崎晃（2004）「日本における幼児教育に関する教育心理学的研究」教育心理学年報 Vol. 43. 145-155

中村仁美・南部志緒（2007）「ブックスタートの実態調査と効果的な実施方法についての検討」日本図書館情報学会誌53(2). 75-89

（まきの けいいち：人間科学科 人間形成専攻 教授）

（おのやま かよ：附属幼稚園 教頭）

（あおぬま のりこ：附属幼稚園 特任教諭）

資料 1 平成25年度 筑紫女学園大学短期大学部附属幼稚園 教育課程

教育理念	自律（自己への目覚め）・和平（他者への目覚め）・感恩（生命への目覚め）			
教育方針	「まことの保育」を基盤に生きる力の基礎を培う			
教育目標	心豊かでしなやかに生かされて生きる園児を育成する			
2歳児 3歳児 目標	4歳児 5歳児	人との関わりを喜びながら、身近な環境や活動に興味を持ち、遊びを広げていく。 人との関わりや活動に興味を持ち、遊びを広げていく。 周りの人との信頼関係をもとに、何事にも意欲的に取り組み深めていく。		
発達過程	～2歳	～3歳		
	～4歳	～5歳		
発達過程	<ul style="list-style-type: none"> 基本的な生活習慣の発達 話し言葉の基礎の形成 知的興味、関心の高まり 身体能力の発達、バランスの形成 身近な人との信頼関係の形成 素直な感情表現 			
保育の内容				
年齢	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
健康	<ul style="list-style-type: none"> 喜んで体を動かそうとする 生活のリズム（毎日の生活）の中で、生活習慣を身につけていく 	<ul style="list-style-type: none"> 食事、排泄、衣服の着替え等基本的生活習慣が身につけていく 体を動かすことを喜ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> 基本的生活習慣が身につく 自分でやろうとする 体を動かして遊ぶ経験を多く持ち、楽しむことができる 	<ul style="list-style-type: none"> 基本的生活習慣が自立し、さらに回りの清潔等に目を向けることができる 十分に体を動かすことにチャレンジし、克服していく
人間関係	<ul style="list-style-type: none"> 身近な人に親しみ、安心して生活する 家族以外の存在がわかり親しんでいく 初めてのことを身近な人と一緒にやってみようとする 	<ul style="list-style-type: none"> 先生や周りの友達に親しみ、安心して関わることができ 生活や遊びの中で必要なルールを経験し、獲得していく していいこと、悪いこと、経 験を通して知っていく 	<ul style="list-style-type: none"> 友達との関わりの中で、自他との違いを知り、そのうえで仲良く遊ぶ力を身につけていく 納得したり、考えたりの経験をしていく していいこと、悪いことの判断がわかるようになる 	<ul style="list-style-type: none"> クラスやグループ等の中で自分を主張し、また友達を受けられる経験をし、自他を理解していく 友達と一緒に活動の中で、失敗や挫折等も経験し、成功や達成感等共有する喜びを持つ していいこと、悪いことの判断が自分ででき、行動を伴うことができる
環境	<ul style="list-style-type: none"> 身近な生き物に触れ、親しむ 季節の自然物に触れ、感興を楽しむ 	<ul style="list-style-type: none"> 遊びの中で様々なことに興味を持ち、楽しく経験する 自然に関わる経験を喜ぶ クラスでの食物栽培を通して、食物を育てることへの興味を持つ 	<ul style="list-style-type: none"> 周りの自然に積極的に関わり新しい経験を楽しむ 興味や関心をさらに深めたり、喜んでいく いも栽培を通して、食物を自分で育てる楽しさ、収穫の喜びを感じる 	<ul style="list-style-type: none"> 稲の栽培を通して、いのちや食物のありがたさ、自然の力を知っていく 自然の場、季節を満喫し、遊びや活動につなげ、発展させていく
言葉	<ul style="list-style-type: none"> 言葉のやりとりができ、言葉と行動がつながっていく 	<ul style="list-style-type: none"> 毎日の絵本の読み聞かせを楽しみ、言葉の数が増え、聞く力の基礎ができている 先生や友達との会話で話し言葉が形成される 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の気持ちや要求がスムーズに言葉にできる 絵本を楽しみ聞き力が広がる 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の思いを言葉にでき、人との関わりによって言葉が大切なものということを理解していく 日々の絵本の読み聞かせから聞く力、読む力、字に対する興味をもつ
表現	<ul style="list-style-type: none"> 歌やわらべうた、リズムを楽しむ 絵本を読んでもらうことを喜ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> 歌、わらべうた、体操等、友達と一緒に楽しく表現する 絵本をベースに、表現遊びを楽しんでいく 	<ul style="list-style-type: none"> 歌、わらべうた、ダンス等を遊びの中に取り込み、友達と一緒に楽しんでいる 工夫して製作したり自分なりの表現したりできる 	<ul style="list-style-type: none"> 製作等、興味や工夫の幅が広がり、創意工夫の楽しさを感じる クラスやグループ等で力を合わせ、一緒に取り組む面白さや達成感を味わい、表現活動をすることができ
食育	<ul style="list-style-type: none"> 何でも食べようとする 絵本を読みながら楽しむ 	<ul style="list-style-type: none"> 食前、食後の言葉を唱え、食物のありがたさを知る 友達と一緒に楽しく食事をし、様々な食物を喜んで食べるようになる 	<ul style="list-style-type: none"> 食前、食後の言葉の意味がわかり、おいしく食べようという気持ちを持つ 	<ul style="list-style-type: none"> 食べられるのちを知り感謝の気持ちをいかに大切にする 稲作を通して、食物が命の基礎になることがわかり、何でも意欲的に食べようとする
宗 教 教 育	<ul style="list-style-type: none"> 基本的生活習慣を、自分でやってみようとする 身近な人に親しむ 	<ul style="list-style-type: none"> 朝の礼拝、婦人の礼拝など基本的生活習慣が身につけていく いのちについて折々の経験を話し、知っていく 	<ul style="list-style-type: none"> 基本的生活習慣が身につく 朝、婦り、食事の挨拶等が、様々な場面できることができる いのちがあることがわかり、行動とつながる 	<ul style="list-style-type: none"> 相手や場面に応じた挨拶が身につく いのちについて自らわかり、考えることができる
いのち	<ul style="list-style-type: none"> いのちについて折々の経験を話し、知っていく 	<ul style="list-style-type: none"> いのちについて折々の経験を話し、知っていく 	<ul style="list-style-type: none"> いのちについて折々の経験を話し、知っていく 	<ul style="list-style-type: none"> いのちについて折々の経験を話し、知っていく

資料2 年間教育計画 5歳児

筑紫女学園大学短期大学部附属幼稚園
作成日：平成25年9月

教育理念	自律(自己への目覚め)・和平(他者への目覚め)・感應(生命への目覚め)		家庭と共に	子育て支援 連携 大学	3学期(1~3月)
	生きる力の基礎を培う	自然を愛し、生き生きとした子どもを育てる			
教育方針	周囲の人との信頼関係をともに、何事にも意欲的に取り組む深めていく。				
教育目標	・年長になった事を喜び意欲的に活動に取り組む。 ・新しい先生や友達に親しみ、自分を出していく。 ・集団生活でルールを守る。 ・箱の世話をしながら自分の成長と重ねていく。 ・自分の経験や気持ちや言葉を言葉にして表現する。				
年間目標	1学期(4~7月)				
期のねらい	健康		夏期保育		
	人間関係・環境・言葉表現・食育		2学期(9~12月)		
主たる活動(領域)	・かけ遊び・こーの森での遊具 ・おみせやさん・お泊り会 ・ちぎり絵(友達への誕生日プレゼント) ・戸外遊び(泥だんご作り、散歩、虫探し、草花遊び等) ・染め物・室内遊び(廃品、絵本、カプラー、折り紙等) ・お母さんのメッセージ・お父さんのメッセージ ・絵画(竹の子)・絵本の読み聞かせ ・観察ノート・プレゼント作り(父・母) ・パケツ箱(発芽→水やり)・味噌作り ・果物の収穫(すもも、びわ等)・竹の子ご飯パーティー		・クラス全員で目標に向かって取り組み達成感を味わう。 ・クラスやグループでの活動を通して協力し合う喜びを感じる。 ・一人一人が集団での意識を持つ。 ・園外でマナーを守り実際の経験をを通して自然を学ぶ。 ・創作りの過程で色々な事を学び、収穫する喜びを味わう。 ・運動会に向けて ・竹馬 ・運動会 ・ちぎり絵(友達への誕生日プレゼント) ・戸外遊び(泥だんご作り、散歩、虫探し、草花あそび、どろんご作り拾い等) ・室内遊び(廃品、絵本、カプラー、折り紙等) ・そうめん流し ・園外保育 ・絵本の読み聞かせ ・発表会 ・発表会に向けて ・絵画(運動会、発表会)・楽器あそび(鍵盤ハーモニカ) ・パケツ箱(すもも対策、箱割り→天日干し→脱糶→もみすり→糶米)・新米パーティー		
	・朝の挨拶、帰りの集まり、礼拝(礼拝時の献花、献灯、調声の心構えを知り、落ち着いて礼拝に参加する。) ・日常生活(結核除菌のちのちの尊重を感じる。様々な人の話をよく聞く。身近な人に対して感謝の気持ちを持ち、自分から「ありがとう」と言う。) ・行事(花祭り：お釈迦様の誕生日降誕会：親鸞様の誕生日)		・朝の挨拶、帰りの集まり、礼拝(4つのお約束をもとに、阿弥陀様の「大きな願い」を知る。) ・日常生活(様々なおかげで生きていることを日々生活から感じる。相手の立場になって物事を考える。) ・行事(成道会：お釈迦様が悟りを開かれた日)		
宗教教育	・朝の挨拶、帰りの集まり、礼拝(礼拝の仕方が身に付き、自分ですることができ。みほとけ様とお約束がわかり、年長に向かっていく。) ・日常生活(様々なおかげで「生かされている」事に気づき、感謝の気持ちを持つ。4つのお約束を心がけ、行動する。) ・行事(報恩講：親鸞様が亡くなられた日) (涅槃会：お釈迦様が亡くなられた日)				
子どもの姿	・年長になった事を喜びクラスに目に向き始めクラスへの意識が出てくる。活動や行事に意欲的に参加する。 ・自分の顔を世話をしながら自分の成長と重ねていく。 ・話を聞く大切さを感じ、全体での話を自分の事として受けとめ行動する。				
援助・配慮	・一つ一つの活動や子どもの姿を認め、自信につなげていく。 ・一人一人の触れ合いを大切に信頼関係を作り、クラスの友達に目や向きを伝えていく。 ・話を聞く大切さを伝え、意識できるような働きかけをしていく。 ・箱の生長過程を伝え、一緒にその生長を喜んでいきながら、生命のつながりに気付かせるようにする。 ・自分の気持ちを言葉で表現できるきっかけを作っていく。				
子育てに関するミニ講座や講演会、参観等を行い、子育てに関する悩みを共有したり、アドバイスや意見交換を行う場を提供する。	連携	子育て支援	2学期(9~12月)	3学期(1~3月)	子育てに関するミニ講座や講演会、参観等を行い、子育てに関する悩みを共有したり、アドバイスや意見交換を行う場を提供する。
発達相談員(大学教員)による、保育観察、個別カウンセリング		大学			発達相談員(大学教員)による、保育観察、個別カウンセリング
発達相談員(大学教員)による、保育観察、個別カウンセリング		大学			発達相談員(大学教員)による、保育観察、個別カウンセリング

